

## 近 況 報 告

浅 海 重 夫

巻頭言では主任を意識してそれらしい言辞を弄したけれども、ホンネとタテマエの両面がものごとにあるとすれば、巻頭言はタテマエで、つい先頃まではまだ若い者と呼ばれていた仲間のひとりの、主任などマッピラゴメンというのがホンネである。社会集団を運用させ、その集団の対内的および対外的利害を調整する管理者が必要であって、比較的年長者がこれに当るのがひとつの方法らしく、浅井先生が突然附属高校長に推された今年度にわかに主任教授になってしまった。およそ政治的なことが嫌い不得手、人を使うことも全く性に合わない者が、長と名づく役目をつとめることはいかに大儀なものか、性に合った人には判ってもらえないだろう。

難しい話はやめて近況報告にうつる。2人しかいない子供の2番目が今年大学生となり、人間のつとめの一端を完了した思いでいる。長男は来年卒業、しかし御多分にもれず就職難だが、それを苦にしているのか官任えをまだしなくてよいとのんきに安心しているのかよく心理はつかめない。しかし経済力がついてやがて結婚でもされ、孫かなにかにとりまかれてマゴマゴしている姿を中生代頃の卒業生諸姉（注、お茶の水地理11号、94頁参照）に想像されると思うのは耐えがたい。つくづく娘でなくてよかったと感じている。

もうひとつ、ことしは家を造り直した。大へんおそまきながらようやく家族にそれぞれ個室を与えることが実現しただけのもの、何故か教室内で豪邸を建てたというあらぬうわさの種にされたく、ここに嚴重に抗議と訂正をいたしておく。何しろ大地震が予想されることでもあり、古邸ではすぐにひっくり返ってしまうので、耐震的に安心のつく家にしようと考え、はやりの軽量鉄骨プレハブではなく、木造の金融公庫規定の建築法に従った。予期以上に公庫の基準と検査がきびしくて驚かされたが、法は自分を守るための最低の規制であることを今回の建築に関する限り、身にしみて痛感した。

## 近 況

式 正 英

このところ忙しい忙しいとボヤき放しである。昭和50年5月から一般教育委員長になり、10月からは評議員を兼ねている。もはや大学人としての経験は短いとはいえないもののひとから「両方とも激戦だよ」といわれながらも、始めのうちはボンヤリとしていた。それが両職とも普通の時期ではないのだから、殊更大変なのである。渦巻きの中に翻弄されて、我が身の姿勢を保つのがやっという有様である。足元からすくわれそうになり放しで、前に後に大分傾いた姿勢なのではないかと我ながら思うことがある。大学の一般教育は現在全国的な規模で変革の時期に直面している。一般教育について大学関係者がこれまでどの程度真剣に考えてきたかに問題がある。専門教育と一般教育を

如何に調和させてゆくかは、大学での学問の本質に関係している。教養部を持たない、さりとて一般教育の責任体制のない国立大学が、本学を含めて21大学あり、これらの連絡協議会が結成されて、今年初めから活発に行動をおこし始めた。そのつきあいで臨時総会の会場をひきうけたり、報告書を作成したりという騒ぎである。

一方、新聞にも報道されたようにドクターコース「人間文化研究科」の開設申請が、文教育学部を中心に行なわれているので、評議会メンバーとしては緊張の連続である。これまでは大学行政にはせいぜい学生委員や学寮委員長どまりで参画していた程度だったのだが、歳まわりの所為か突如檜舞台にひきずりあげられた感じである。職人的稼業である研究の仕事とは両立し難い嘆きをかこっている。

昭和49年度に科研費総合(A)の「第四紀気候変化と地形及び湖底堆積層の対比に関する研究」のまとめと、同年秋の日本地理学会富山大会でのシンポジウム「日本アルプスの氷河地形」の補足の意味で、企画した研究論文集「日本の氷期の諸問題」が11月早々にようやく刊行の運びとなった。編著の図書を初めて世に送り出した点で私自身も意義深く感じている。それやこれでフィールドワークに思うように出かけられないのは何とも残念なのだが、以前から気になっているものに、富士川下流域にある鷺ノ田礫層がある。これを上流側に追いかける仕事を年末の休みにでもやってみたい。この秋には上越新幹線の環境調査の一部を分担して出かけ、紅葉を賞味するおまけがついた。路線は子持山と小野子山の山麓の接する裾合谷の部分を通る。そこは四年前に中之条を卒論にした上田園子氏のフィールドの端にあたっており、思いがけぬ再訪になった。卒論のフィールドは、教官としても忘れ難くなるものなのである。(1975年12月1日)

## 一 年 生 教 師 の 課 題

井 内 昇

年度の途中にこの教室の一員となってから早くも3カ月が過ぎようとしている。それまで17年余勤めた役所に較べると、大学での教育・研究という仕事はかなり異質で、必然的に毎日の時間の使い方も大きく変ることになった。

3カ月前までの生活に較べて最も変わったのは何か、と言えば、それは、人と会い、話をする時間が大巾に減ったことと、新聞、雑誌、官公庁資料といった大量の時事的な情報媒体からすっかり遠ざかってしまったことであろうか。このように各種情報パイプが狭くなったため、世情にうとくなったのは驚く程である。

最初に居た職場では計画部門に所属していたので会議も多く、学界・民間の人たちとの接触も少くなかったし、必要な本を読む時間も結構あった。その次の職場では、一人で文献・資料を利用して調査レポートをまとめる仕事を与えられていたため、最初の職場に較べると人間関係は数分の一に減ったが、一方、毎日目を通す内外の情報資料、文献等の分量は飛躍的にふえ、極端に言えば、毎日時事的情報を漁り、整理するのが日課であったといってもよい。このような情報の洪水の中に居ると、必然的にページを斜めに読むくせが身についてしまう。そして困ったことに、精読の必要のある図書ま